

農学生命科学研究科全体の取組について

中西 友子

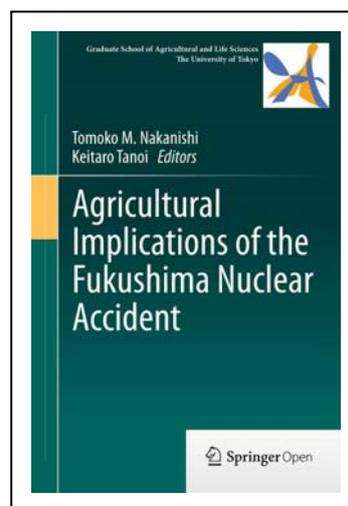
東京大学大学院農学生命科学研究科 放射性同位元素施設・教授

農学生命科学研究科では、福島第一原子力発電所の事故直後から、農学部の教員 40–50 人ほどがボランティアベースで被災地支援研究を行ってきました。研究テーマの数は、作物、土壌、森林、動物、魚、サイエンスコミュニケーションなど 10 以上になります。被災地の 8 割以上が森林を含む農業関連地です。自然相手の調査なので、ひとつの専門から考えても答えは見つかりません。そこで幅広く専門の人たちが集まって議論してきました。そしてその調査研究結果を 3–4 か月ごとに報告会として公開する機会を設けてきました。その報告会も今回が 7 回目となります。

事故から 2 年 5 か月が過ぎましたが、この間の現場での調査から、当初は全く見当もつかなかったことが少しずつ判ってきました。そのひとつが降ってきた放射性物質のほとんどが土壌に吸着されて動かなくなったということです。放射性物質は、事故直後は少し動いたのですが、時間が経過すると共によりしっかり土壌に吸着され、もう森林から流出する放射性セシウムの量は、年ベースで、森林に降った放射能の総量の千分の一以下になりました。

また動物では餌と一緒に放射性物質を食べたとしても、時間の経過と共に体外に出していくことが判ってきました。一方、ウグイスの羽の汚染も事故の翌年になると生え変わり放射能は殆ど検出されなくなりました。

昨年 10 月の時点で得られた結果の纏めは、Springer 社から出版されました。この本の内容（17 章）は全て誰でも無料でダウンロードできます。図も豊富に入っていますので是非ご利用いただければと思います。



この本は英文ですが、その後の結果も入れて今、日本語でも本を出版すべく用意しているところです。

私たちは現場でおきていることを科学的なデータとして蓄積するだけでなく、若い人たちにも何が起きたのかをきちんと伝えていく活動も行っています。その講義は今年から、学部学生や大学院生の単位としても認定されるようになりました。また座学だけでなく、実習も始めたところです(参考 HP : <http://www.agc.a.u-tokyo.ac.jp/fg6/top.html>)。

わたくしたちは放射能汚染についての農業影響について、これからも長い期間を見据えて活動をしていこうと思っているところです。